三人の百姓

秋田雨雀

青空文庫

昔、ある北の国の山奥に一つの村がありました。その村に伊作、多助、太郎右衛門という三人の百姓がありました。三人の百姓は少しばかりの田を耕しながら、その合間に炭を焼いて三里ばかり離れた城下に売りに行くのを仕事にしておりました。

三人の百姓の生れた村というのは、それはそれは淋しい小さな村で、秋になると、山が一面に紅葉になるので、城下の人たちが紅葉を見に来るほか、何の取柄もないような村でありました。しかし百姓たちの村に入るところに大きな河が流れて、その河には、秋になると、岩名や山魚が沢山に泳いでいました。村の人たちは、みんな楽しそうに、元気で働いていました。

伊作、多助、太郎右衛門の三人は、ある秋の末に、いつものように背中に炭俵を三俵ずつ背負って城下へ出かけて行きました。三人が村を出た時は、まだ河の流れに朝霧がかかって、河原の石の上には霜が真白に下りていました。

「今日も、はあお天気になるべいてや。」

と伊作が橋を渡りながら、一人言のようにいうと、ほかの二人も高い声で、

「そんだ、お天気になるてや。」

と調子を合わせて、橋を渡って行きました。三人はいつものように、炭を売ってしまった後で、町の居酒屋で一杯ひっかける楽しみのほか、何の考えもなく足を早めて道を歩いて行きました。

伊作は丈の高い一番丈夫な男だけに、峠を登る時は、二人から一町ほども先きを歩いていま

した。多助と太郎右衛門は、高い声で話をしながら坂を登って行きました。二人は浜へ嫁に行っていた村の娘が、亭主に死なれて帰って来たという話を、さもさも大事件のように力を入れて話していたのでした。

峠を越すと、広い平原になって、そこから城下の方まで、十里四方の水田がひろがって、田には黄金の稲が一杯に実っていました。

「伊作の足あ、なんて早いんだべい！」

と多助は太郎右衛門に言いました。

「ああした男あ、坂の下で一服やってる頃だべい。」

と太郎右衛門は笑いながら答えました。多助と太郎右衛門が、峠を越して平原の見えるところまで来た時、坂の下の方で伊作が一生懸命に二人の方を見て、手を振っているのが、見えました。

「どうしたんだべいな？　伊作あ、己らを呼んでるてばな。」

と多助が言いました。太郎右衛門も顔をしかめて坂の下を見下しました。

「早く来い、早く来い……面白いものが落ってるぞ！」

という伊作の声がきこえて来ました。

「面白いものが落ってるよ。」

と多助は、笑いながら言うと、太郎右衛門も大きな口を開いて笑いました。

「伊作の拾うんだもの、碌なものでなかべいになあ！」
と太郎右衛門は附け足して、多助と一緒に少し急いで坂を下りて行きました。
坂の下の方では、伊作はさも、もどかしそうに、二人の下りて来るのを待っていました。
「騙されたと思って、急ぐべし！」
と多助は、炭俵をがさがさせて、走って行きました。太郎右衛門は、根がはしっこくない男でしたから、多助に遅れて、一人で坂を下りて行きました。太郎右衛門が伊作のいたところへ着いた時には、伊作と多助は大事そうにして、何か持ち上げて見たり触って見たりしていました。
「何あ、落てるんだてよ？」
と太郎右衛門は間抜な顔をして、二人の立っている間へ顔を突込んでやりました。
「見ろ、こうしたものあ、落ってるんだてば。」
と伊作は、少し身体を退けて、太郎右衛門にも見せました。
「ははあ！　これあ、奇体な話でねいか！」
と太郎右衛門は叫びました。今三人の前に生れてから三月ばかり経った一人の赤児が、美しい布に包まれて捨てられているのでした。伊作の話では、伊作の最初に見付けた時は、赤児はよく眠っていたということでした。
「一体何処の子供だべいな？　いい顔つきっこをしてるのにな！」

多助は赤児の顔を見て、

「それさ、いい着物を着て、ただ者の子供じゃあんめいよ。そんだとも、うっかり手をつけられねいぞ。かかり合いになって牢屋さでも、ぶっこまれたら大変だ。触らぬ神に祟なしって言うわで。」

と附足して言いました。

「そうだども、不憫でねいか、獣にでも見つかったら、食われてしまうでねいか？」

と、気の弱い太郎右衛門は言いました。

「子供も不憫には不憫だども、勿体ねい着物っこを着てるでねいか？」

と平生から少し慾の深い伊作は、赤児を包んでいる美しい布を解いて見ました。すると、赤児の腹のところに、三角にくけた胴巻が巻きつけてありました。伊作は赤児の泣くのも耳に入らないと言うように、その財布を取り上げて、片方の端を持って振り廻して見るとその中から小判がどっさり出て来ました。それを見て、多助も太郎右衛門も吃驚してしまいました。

「何んて魂消た話しだ！」と多助は青い顔をして太郎右衛門を見ると、太郎右衛門は今までこんな大金を見たことがないので、胆をつぶしてしまって、がたがたふるえていました。

伊作の発議でとにかく三人はその赤児を拾うことにきめました。

「この金はとにかく、己らが預って置くことにすべい。」

と伊作はさっさと自分の腹へ巻きつけようとしましたので、それを見た多助は、大変に怒って、

伊作と喧嘩を初めました。そこで伊作は仕方がないので、小判を十枚だけ多助に渡しました。そして太郎右衛門には五枚だけ渡して、

「お前に子供がないわで、この子供を育てたらよかべい。」

と言いました。

太郎右衛門は、その時伊作に向って、

「己ら、子供が不憫だわで、つれて行くども、金が欲しくて子供をつれて行くんでねい。」

と言ってどうしても金を受取りませんでした。多助は、もし太郎右衛門が受取らなければその五枚も伊作に取られてしまうのを知っているので、是非受取るようにすすめたけれども受取りませんでした。伊作は太郎右衛門がどうしても受取らないので、その内の二枚を多助にくれて、後の三枚を元の胴巻へ入れて、腰に巻きつけてしまいました。多助も後二枚だけ余計にもらったので、まんざら悪い気持もしませんでした。三人は城下へ行くのをやめて、その日は自分の村へ帰ってしまいました。

太郎右衛門は拾った赤児をどうして育てて行こうかと、道々心配して帰って来ましたが家へ帰ってお神さんに赤児を見せると、子のないお神さんが大変喜んでくれたので、ほっと安心しました。しかし伊作に口止めされているので、小判の話なぞは一言も言いませんでした。「もし金のことが発覚すれば、三人同罪で牢屋へ行くのだ。」と伊作は馬鹿正直な太郎右衛門に言い含めて置いたのでした。

太郎右衛門と、太郎右衛門のお神さんが、この赤児を見ているうちに、今まで一度も感じたことのないような嬉しい気持になって来ました。お神さんは、太郎右衛門に向って、

「この子はお寺の子でねえかしら！」

と言いました。そのわけは、赤児を包んでいる布は緞子という立派な布で、お神さんが城下のお寺で、一度見たことがあるからということでした。

「馬鹿な女子だな、何してお寺で子供を捨てべいな！」

と太郎右衛門はお神さんを叱りつけました。

その晩、太郎右衛門夫婦は、大きな釜に湯を沸して、厩の前で赤児に湯をつかわせてやることにしました。お神さんは、何気なく赤児の帯をほどいて、厩の方へつれて行こうとすると、大きな振袖の中から一枚の紙片が落ちて来ました。

「何んだべい！」と言って、その紙片を亭主の太郎右衛門に渡しました。太郎右衛門はそれを拾って見ると、その紙片に、下のような文字が平仮名で書いてありました。

「ゆえありて、おとこのこをすつ、なさけあるひとのふところによくそだて。よばぬうちに、なのりいづるな、ときくれば、はるかぜふかん。」

この平仮名を読むために、夫婦は一晩費してしまいました。太郎右衛門が読んだ時と、お神さんの読んだ時と文句がちがうので大変に困りました。

「何しろ、拾った人に、親切にしてくれろってことだべい。」

と太郎右衛門が言うと、お神さんも、

「そんだ、そんだ。」

と同意を表しました。

二人はその晩、拾った赤児を替り番子に抱いて寝ました。赤児の柔かい肌が触れると、二人とも何んとも言い表わしがたい快感を感じました。夜になってから、赤児が二度ほど泣きましたが、二人はその度に、甲斐甲斐しく起上って、あやしてやったり、「おしっこ」をさせてやったりしたので、朝方になって、大変よく眠りました。お神さんが早く起きて、雨戸を明けると、そこから明るい太陽が遠慮なく射し込んで来ました。お神さんは、急に自分が偉い人間にでもなったような自慢らしい気持がするので、不思議に思われる位でした。

太郎右衛門も太郎右衛門で、自分に抱かれて眠っている子供の顔を見ていると、その子がほんとうに自分の生んだ子供のような気がするのでした。

「見ろ、この子は何んていい顔してるんだんべいな！」

と太郎右衛門は、朝の仕度にかかっている、お神さんを呼んで、子供の顔を見せました。

「ほんとね、いい顔っこだこと。こんな子供ね百姓させられべいか！」

とお神さんは、子供の寝顔を見て、つくづくと言うのでした。

太郎右衛門が子供を拾ったという噂が村中一杯に拡がりました。夕方になると村の神さんたちや子供たちがぞろぞろ揃って捨児を見に来ました。そして、余り美しい児なので、みんな驚

いてしまいました。そして、

「太郎右衛門さんとこあ、なんて仕合せだんべい。」

と口々に言いはやしながら帰りました。

これまで太郎右衛門の家はただ正直だというだけで、村では一番貧乏で、一番馬鹿にされて暮した家でしたが、子供を拾ってからは大変賑やかな幸福な家になってしまいました。しかし太郎右衛門の家には田畑もないのに、子供が一人殖えたので、貧乏は益々貧乏になりました。しかし太郎右衛門は一度も不平を言ったことがありません。田を耕している時でも、山で炭を焼いている時でも、太郎右衛門は、子供のことを思い出すと、愉快で愉快でたまりませんでした。「早く仕事を終えて子供の顔を見たいもんだ。」と心の中で思いながら仕事をしていました。

子供の名は、朝拾ったので、朝太郎とつけましたが、その朝太郎も、もう四歳になりました。顔立こそ美しいが、始終田畑や山へつれて行くので、色が真黒になって、百姓の子供として恥かしくないような顔になってしまいました。無論着物なぞも、百姓の子供の着るようなものを着せていたので、ほんとに太郎右衛門夫婦の子供だと言っても、誰も不思議に思うものがない位でありました。

話変って、あの太郎右衛門と一緒に子供を見つけた伊作と多助はどうしたでしょう？　伊作と多助はその後、だんだん仲が悪くなって、いつでも喧嘩ばかりしていました。伊作はある年

の夏、橋の畔に小さな居酒屋を造えましたが、村には一軒も酒屋がなかったので、この居酒屋が大層繁昌してだんだん儲かって行きました。伊作は今では田を耕したり、炭を焼いたりしないでも、立派に食べて行かれるようになりました。多助は、その頃村の端に小さな水車小屋を持っていましたが、毎日伊作の店に寄っては酒を飲んだり、干魚を食たりして、少しも勘定を払わないので、それが土台になって二人はいつでも喧嘩をしました。二人は喧嘩をしたかと思うと仲直りをし、仲直りをしたかと思うと、また喧嘩をしました。

村の人たちには、どうしてあんなに仲の好かった伊作と多助が、こんな喧嘩をするようになったのか誰も知りませんでした。

朝太郎が四歳になった秋の初めに、城下から代官様が大勢の家来に空駕籠を護らせて、この淋しい村へやって来ました。村の人たちは胆をつぶして行列を見ていました。すると代官様の一行は、庄屋長左衛門の家にどやどやと入りました。庄屋は顔を真青にして代官様の前に出ました。

「まだ紅葉にはお早ようございますが、一体どういう御用でおいでなさいましたか、どうぞ御用を仰せつけてください。」

と庄屋は畳に頭をつけて挨拶しました。すると、代官様は笑って、

「実は、今日は妙な相談があって来たのだが、相談にのってくれるだろうかね？」

と言いました。長左衛門は、益々恐縮して、

「これは誠に恐れ入ります。御代官様の御相談ならばどんなことでも御相手になりましょう。どうか何んなりと仰せつけください。」

と言いました。

「早速だが、この村に朝太郎という男の子がいるそうだが、その子供を貰い受ける訳には行かないだろうか？」

と代官は言い出しました。

「さあ……」と言ったきり、長左衛門は何とも後の句が出なくなりました。何故といいますと太郎右衛門が朝太郎をこの上もなく愛しているのを、庄屋もよく知っていたからです。「実は」と長左衛門は怖る怖る代官様の顔を見て、「あの子は訳あってあの太郎右衛門が拾い上げて、これまで育てて参りましたもので……」と言いかけた時、代官様は、

「それは、私も知っているのだ。知っているからこそお前に相談をするのだ。実はあの朝太郎というお子は、殿のお世継の吉松様という方なのだ。さあ、こう申したら、お前もさぞ驚くだろうが、ちょっとした殿のお誤りから、あのお子が悪者の手にかかってお果てなされなければならない破目に立到ったのを、色々苦心の末に、この山奥にお捨て申して、律儀な百姓の手に御養育いたさせたのだ。その証拠はお子を拾い上げた者が所持しているはずだ。とにかく一刻も早く吉松殿にお目通りいたしたい。」

と大変真面目な言調で言いました。

庄屋の長左衛門も初めて事情が解ったので、早速太郎右衛門のところへ行って、神棚に入れて置いた書物を出させ、太郎右衛門と朝太郎を同道して、代官様の前に表われました。すると代官様と家来たちはちゃんと室の外までお出迎えして、朝太郎を床の間の前に坐らせて、丁寧にお辞儀をしました。太郎右衛門は、庄屋から大体の話はきいて来たようなもののこの有様を見て、吃驚してしまいました。朝太郎は何も解らないので、皆なの顔をきょときょとと見廻わしているばかりでした。

その日の夕方、日の陰る頃を見計って朝太郎の吉松殿は、牡丹に丸の定紋のついた、立派な駕籠に乗せられて、城下の方へつれて行かれました。そして、その代りに莫大な金が太郎右衛門夫婦に残されました。

「何んてお目出たい話だ。お前のとこの朝太郎が殿様になるんじゃないか。」

と庄屋の長左衛門が、駕籠の見えなくなった時、太郎右衛門に言いますと、太郎右衛門は眼に涙を一杯溜て、

「何が目出たかべい……庄屋様、後生だわで、殿様がいやになったらいつでも遠慮なく家さ戻って来るように言ってやってくれべい！」

と言って涙を留度なく流しました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学名作集（下）」岩波文庫、岩波書店
　1994（平成6）年3月16日第1刷発行
　2001（平成13）年5月7日第12刷発行
底本の親本：「太陽と花園」精華書院
　1921（大正10）年
初出：「婦人公論」
　1920（大正9）年6月
入力：門田裕志
校正：Juki
2012年12月14日作成
2016年1月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三人の百姓

秋田雨雀

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/